

学位論文題名

アパブランシャ語説話文学を中心とした
中期インド語の言語学的研究

学位論文内容の要旨

本論文の観点と方法

本論文は中期インド語の一つであるアパブランシャ語について、ジャイナ教の説話文学を中心に、仏教文献や戯曲作品等、広範な文献を検討し、ジャイナ教における説話の伝承形態の特色を解明する。また、仏教文献におけるアパブランシャ語は、従来東部アパブランシャ語として区別されていたが、その実際は他のアパブランシャ語と明確に区別されるものではないことを明らかにする。仏教文献におけるアパブランシャ語の使用は、タントリズム文献など特異なものに限られていたのである。

また、古期インド語から近代インド語へという大きな変化の過程の中で、いまだ判然としないインド語史の中間部分について、アパブランシャ語の特色である孤立語的な傾向と能格構造の出現に着目し、屈折型から孤立型へ、そして主格構造から能格構造という大きな変化の途上にあることを論じ、他の典型的な構造を持つインド語以外の諸言語との比較により、言語構造一般の理解にとって得るところの多いものとなるという知見を提示する。

本論文の内容

第1章 はじめに アパブランシャ語概観

アパブランシャ語は中期インド語において新層に分類され、それによって書かれた主な作品は紀元後6世紀から12世紀に至るが、統一された文法の規範がないままインド各地で使用されていた。アパブランシャ語文法の諸特徴は全て近代インド諸語と共通するが、動詞の活用の体系が存続しているなど、古い屈折的な性格も持ち、インド語史の観点から中間的特徴を有する言語であると概観する。

第2章 アパブランシャ語の諸方言とその分類に関して

インド中世の文法家たち、近代のH.JacobiとL.Alsdorf、そしてアパブランシャ語歴史文法をまとめたG.V.Tagareの見解を比較し、それぞれの分類の妥当性を検討する。中世の文法家の分類は実例に欠け、Jacobi、Alsdorfは比較的厳密な分類を立てたが、当時利用可能であったテキストが僅少であったため、包括的なものには至らず、Tagareの西、南、東の三分類が各地のテキストに目を配った包括的な分類であるという点で最も妥当な見解であるが、アパブランシャ語は文語としてのみ用いられ、共通語的要素の強かった言語であるため、それぞれの差異は少なく、特にTagareの設けた、地域的に近い西と南の区分に疑義を呈する。

第3章 アパブランシャ語仏教文献

東インドの仏教徒もアパブランシャ語を用いており、その言語特徴は他のものとは異なるとされている。その実態を見るために東部アパブランシャ語で著されている文献をまとめ、その言語について考察する。

第4章 東部アパブランシャ語の特徴

東部アパブランシャ語が独自に持つとされる特徴は書写上の問題に還元することが可能であり、東部アパブランシャ語は地方語ではなく、むしろ北インド全般に広がる文章語であるとしたほうが妥当であり、独自性を主張することは難しいことを論じている。

第5章 戯曲作品におけるアパブランシャ語

アパブランシャ語を用いるヒンドゥーの戯曲は本章で取り上げる二点のみであり、ヒンドゥー戯曲はその数からみてアパブランシャ語文献群の中では特殊である。それに対して詩論、戯曲論を含む文学理論書には詩作のための言語としてアパブランシャ語がしばしば現れ、一定程度の文学的な地位を得ていたことがうかがわれることを示唆する。

第6章 アパブランシャ語とタントリズム

アパブランシャ語は古典期以降、文語の一つとしての地位を認められたが、その用途には偏りが見られる。主な用途として、戯曲中の台詞、説話、タントリズム文献の三種類が挙げられ、北部・西部インドでは口語を擬した言語としてアパブランシャ語を用い、文学的效果を出しているのに対して、カシミール、ベンガル両地域においては密教経典や偈頌などに用い、神秘的な性質をアパブランシャ語に付与している。この「言語の上では同一、用法の上では異質」であるインド各地のアパブランシャ語の存在は、ある時期に西部インド文化が東部、北部へ波及したという文化現象の存在を物語るものであることを論ずる。

第7章 ジャイナ教の行伝説話における転輪聖王、 第8章 *Harisenacariu*校訂

ジャイナ教説話*Harisenacariu*の伝承過程を考察する。この作品はアパブランシャ語によるジャイナ教行伝説話であり、刊本は未だ存在せず写本のみが現存し、これを第8章で申請者自身が蒐集した2写本に基づき校訂テキストを作成している。説話中の主人公である*Hariseṇa*はインドを支配する転輪聖王として描かれ、他のジャイナ教説話においても度々言及されている。主にその記述内容を他説話の*Hariseṇa*についての記述と比較し、*Hariseṇa*のより詳しい事蹟を扱った本作品は、同言語の*Paumacariu*ではなく、ジャイナ・マハーラーシュトラ語の*Paumacariya*の記述を増広したサンスクリット語の*Padmapurāṇa*の系統に属していることを明らかにする。

第9章 アパブランシャ語自動詞文における能格性について

アパブランシャ語はインド語史の中で近代諸語と古期諸語の中間的な地位を占めているが、その理由はそれ以前には見られない統辞上の諸特徴を有しているためである。その一つが能格構造である。能格構造とは動詞と名詞の統辞的な関係を現す概念である。しかし、実際の文献から実例を細かく拾っていくと、単純に能格構造とは言い切れない例が多数見られる。この類は必要とする名詞が一つか二つかといった統辞上の基準ではなく、動詞がその支配する名詞に対してどのような影響を及ぼすかという意味上の基準によっている。この特異な類は活格構造と呼ばれる。またこの現象は元々サンスクリット語などの古期インド語にも内在していた特徴によっている可能性もある。他のプラークリット諸語も含めて調査し、中期インド語における能格性の出現のありかたを明らかにする。

第10章 アパブランシャ語文法

アパブランシャ語は種々の作品に使われはじめてから、標準となる文法が編纂されることはなかった。*Paumacariu*や*Mahāpurāṇa*など代表的とされる作品が概ね現れた後、12世紀にグジャラート地方のジャイナ教徒Hemacandraがその文法を*Siddhahemaśabdānuśāsana*の中でまとめた。これはサンスクリット語やプラークリット諸語、アパブランシャ語をインドの伝統的な文法記述手法で示したものである。本章ではその記述をもとにアパブランシャ語の規範的な文法を示す。ただ、Hemacandraの文法は語の形態を示すに留まっているため、統辞面での特徴を補った。また同じくHemacandraによって著された韻律の要覧である*Chando'nuśāsana*をもとにアパブランシャ語作品に現れる主な韻律についても言及する。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 細 田 典 明

副 査 教 授 藤 井 教 公

副 査 教 授 津 曲 敏 郎

学 位 論 文 題 名

アパブランシャ語説話文学を中心とした 中期インド語の言語学的研究

本論文の研究成果は学界に様々な新知見を呈するものであり、以下の4点に要約される。

1. アパブランシャ語の分類に関する諸説の検討

インド中世の文法家たち、近代のH.JacobiとL.Alsdorf、そしてアパブランシャ語歴史文法をまとめたG.V.Tagareの見解を比較し、それぞれの分類の妥当性を検討する。中世の文法家の分類は実例に欠き、JacobiやAlsdorfは比較的厳密な分類を立てたが、当時利用可能であったテキストが僅少であったため、包括的なものには至っていないことを批判する。これまでの研究で最も妥当な見解であるTagareの西、南、東の三分類について、地域的に近い西と南の区分に疑義を呈し、アパブランシャ語の分類について、新たな分類の基準を示した。

2. 仏教タントリズムとアパブランシャ語

アパブランシャ語文献は残存するほとんどのものがインド西部のジャイナ教徒によるものであるが、東インドの仏教徒もアパブランシャ語を用いており、従来その言語特徴は他のものとは異なるとされていた。その実態を調査した結果、東部アパブランシャ語が独自に持つとされる特徴は書写上の問題に還元することが可能であり、独自性を主張することは難しいことを解明した。東部アパブランシャ語は地方語ではなく、むしろ北インド全般に広がる文章語であるとしたほうが妥当であるとする見解は、従来全く指摘されなかった成果である。

3. アパブランシャ語の分裂能格性

アパブランシャ語の分裂能格性について、非能格動詞も能格をとる現象を指摘した。能格構文の出現条件はアスペクトという条件を除けば、外項か内項かという意味上の性質で能格の出現が条件付けられている。そのためアパブランシャ語の完了アスペクトにおける格表示は能格—絶対格と活格—不活格が混合した体系になっている。このような特徴は近

代インド諸語にも見られるが、それが既に中期インド語の段階で生じていることを論じた。その現象に対して整合性を持った説明は未だ存在しない。そのため、より多くの用例を収集して活格型自動詞のふるまいの条件を明らかにすることが課題となる。

4. *Harisenacariu*の伝承過程

アパブランシャ語ジャイナ教行伝説話*Harisenacariu*は、刊本は未だ存在せず、インドで蒐集した写本2点から校訂し、その伝承過程を明らかにした。すなわち、同種の諸作品のうち大部の*Paumacariya* (3世紀)、*Padmapurāṇa* (7世紀)、*Paumacariu* (8世紀)に含まれる*Hariseṇa*王の伝記が本作品の記述と話の筋が酷似する。その中で、ジャイナ・マハーラーシュトラ語の*Paumacariya*の記述を増広したものがサンスクリット語の*Padmapurāṇa*であると考えられていたが、アパブランシャ語の*Paumacariu*の記述は非常に簡潔であり、*Padmapurāṇa*を介せずに成立したものと推測する。そのため*Hariseṇa*のより詳しい事蹟を扱った本作品は同言語の*Paumacariu*ではなく*Padmapurāṇa*の系統に属すると結論づける。この*Harisenacariu*の伝承過程をまとめ、その刊本が未だ存在せず写本のみが現存している中で、写本から校訂し、文法から韻律に至るまでまとめた功績は大きい。しかし、難解であるとはいえ、その翻訳を示し得なかったことは本論の瑕疵であり、その本論中における構成上の位置づけにおいても、第10章とともに資料編として章立てを変更する方が、より説得的である。

以上の通り、本論にはいくつかの問題点は指摘されるが、各論においては、いずれも新知見に富み、アパブランシャ語研究の最先端を行くものとして評価される。また、未解明な点が多いアパブランシャ語について、これ程までの研究をまとめ上げたことは、特記されるべきであるといえる。

本論文は広範なアパブランシャ文献を、新資料も含めて精査し、研究史を批判的に検討した当該研究領域における着実な研究成果であり、全員一致して、山畑氏に博士(文学)の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。